

---

# アイル・ビー・バック

高野川健

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイル・ビー・バック

### 【Nコード】

N2994Q

### 【作者名】

高野川健

### 【あらすじ】

達雄はある日、バイトへ行く途中で、昔世話になった人にパンを届けに行く。それは、達雄の何ヶ月かに1度の決まりごとのようになっていた。しかし、彼はその行為の「本質」がもうひとつわかっていなかった。そのことに、その日、なんとなく達雄はあるビートルズの歌から示唆を受ける。

ラジオの電波が少し途切れかけたので、イヤホンを少し耳に突っ込むと、ステイングの声が頭に響いた。

ロークサーヌ、と声を張り上げていた。懐かしい曲だ。しかしまず信号が変わったので横断歩道を渡らないといけない。

あたりはもう真っ暗でバスを降りるときは、すでに車はヘッドライトをつけていた。

雪の降ったあとで路面は濡れ、あたりには所々溶け残った雪が、半分泥やほこりにまみれて固まってい、普段より凄烈な冷たさを持った空気が人々の足を早めていた。

達雄は、ちょうど信号を渡ったところにあつた教会の前を通つた。人気のない小さな教会だ。庭の奥に白い三角の屋根が見えた。道横の入り口の植え込みがめにはいった。黒いこんもりした固まりのなかに白い星がいくつかちらされていた。

近づいてよく見ると、白いマーガレットのような小菊が、花を広げていた。

乾いて少しよれていた。

ふいに何かのずれが、達雄の記憶のスイッチをいれようとしていた。それを少し探ろうとしながら、達雄は教会から早く離れようとした。

どうも昔からおれには本質というか信なるものというか、そんなものが思い浮かぶと、それから離れたがる癖がある。

たしかにその教会は達雄が子供の頃覚えてはいるがよく見た可能性はある、自分の家から少し離れたいわば隣町にあつた。だからいまでは、いま行こうとしている家島さんのアパートに行くときくらいしか、目にしないのだが、そんなたまにしかないことのほうが、不意に脳を刺激するのだろう。

しかしすぐに教会は視界から消え、替わりに道にそって並んだ昔風の家の壁になった。歩道のすぐそばに塀なしで建てられた家並みそして冬の夕暮れの冷たい風のなかにあたたかいおかずのにおいがまぎれてくる。昔、子供のころよく嗅いだにおいだった。

達雄は、そうかと思った。記憶を感じたのは教会でなくこのにおいだったのだ。

前をゆつくりと黒っぽいオーバーコートを着た髪の長い女性が歩いていった。達雄は抜かさないように歩幅をすこしゆるくし、気にしない距離を保った。

すぐに女性は信号のある交差点で達雄とは違う道へ歩いていった。

そこには三本ならんで同じような大きさの櫛があり、そこから道がYの字型に別れていた。その分岐に地藏があるのを、昼間ここに来たときいつも見ていた。

達雄はその目印から、道路から別れている畦道のような路地に入った。

ラジオは、ロクサーヌが終わり、拍手の音がしていた。どうやらオンエアしたのは、ライブ録音の音源らしかった。しかも、ボリスのときのものじゃなく、ステイングのソロのコンサートらしかった。

達雄はその右手に畑が一面に、暗がりの中にまだ雪の白っぽい広がりをおぼんやり浮かばせているのを見た。

ふと家島さんが留守のとき、荷物に入れる置きメモを書くペンを持ってくるのを忘れたのに気づいた。たぶん家島さんは留守か呼び鈴を押しても出てこないにちがいない。いつもそうなのだ。達雄が毎回このアパートに近いパン屋で家島さんが以前よく食べていると達雄に語っていたパンを、手土産に家島さんの部屋を訪ね、いないのを（いるのかもしれないがでてこないのを）確認するだけのために、いちおう呼び鈴を押し、そのパンを入れた袋にメモを入れてドアのノブにかけて帰ってくる、そのことを始めもつ10年になる。

一時期、やめていた年もあったが、だいたい3ヶ月に一度そのように訪問し、毎回必ず翌日の夜に達雄に家島さんから電話が入った。達雄から家島先生（と達雄はふだん家島さんのことをそうよんでいた）に電話をしてもいいわけだが、家島先生はかかってきた電話には一切出ない。セールスが多いから、と家島先生は言っていたが、ひよっとすると他にもわずらわしい電話があり、それに出ないためのもようだった。先生は家族から実家へ帰れと催促があると昔言っていたことがある。

達雄が家島さんと知り合ったのは当時達雄が勤めていた資格スクールの受講者のなかに家島がいて、達雄が家島からその資格の受講生の情報や、ライバル予備校の実態などを親切に教えてくれたからだ。家島は達雄より年上で、かつて塾の講師も長くやっていたとい、その種の学習のノウハウには詳しく、情報の分析も鋭く、達雄は当時の担当したその資格試験についての情報不足に悩んでいたのが非常に助かった。

こうした職種の本社とは違った部署、拡大戦略の結果、かなりの勢いで次々にできる地方の部署ではよくあることだ。

担当は次々に新しく変わるため引き継ぎの時間がなく、前にやっていた情報がなにもない。本社の担当者とは電話でしか話さず、相手も忙しく支店のことまで当時は気にしなかった。支店の業績まで管理する体制になるまでもう二三年かかった。

だから、受講者を集めるピーアール戦略の参考に、達雄は家島に会う度に、時間を取り、その話をきき、参考にしていた。

ちょうどそんな時期、家島は、実家のご両親と長くその資格（司法試験だったが）受験に受からないでいることをとがめられ、実家に帰ってこいと言われていると言っていた。受験生の情報に詳しい家島が、はたしていつから司法試験の勉強を始めたのか詳しくは聞かなかつたが、塾の講師をやっていたというのも、おそらく受験のためのように思えた。

塾の講師の前はなにをされていたのか、それも詳しく聞いてない

が、家島は国立大の農学部出身だった。だからもしかするとサラリーマンだったのだろう。達雄と知り合った当時は、新聞配達のアアルバイトをしながら、受験勉強にかかる費用をためていたようだった。しかしそのご実家とのいざこざがあり、家島は家賃の高いそれまでのワンルームマンションをでて、昔風の木造アパートに引っ越さねばならないとぼやいていた。

達雄はそのワンルームマンションに一度借りていた本を返すために行ったことがある。その際も家島は出てこず達雄はそのマンションの近くにあった喫茶店で時間をつぶした。

家島が達雄に、達雄の会社に職員のあきかアルバイトはないか、となにかのついでに尋ねたことがあった。達雄は、家島を頼りにしていたが、その担当は新しく達雄の他に一人違う支店から転勤してきた若手が手伝うことになり、達雄は断らざるを得なかった。それ以来、達雄はそのことを言い出さない家島に対し、かなり引け目を感じた。

今から考えると「近くにきたからよりました」というメモと一緒に買ってきたパンを入れた袋を家島のアパートに置きに行くようになったのは、それからかもしれない。幸い、達雄の家と家島のアパートは、それほど離れていない地域にあった。

家島が留守がちでたとえ達雄であってもセールス勧誘かなにかを疑い、来訪者に対応しない一貫した姿勢を貫くのも、パンをおく口実になった。それは達雄が来た印として仕方なくおくものであり、高価なものでは全くないにせよ、お仕着せがましい施しの意味あいがいくぶんなくなるように達雄には思われた。

アパートの前の空き地は雪がまだ残っていた。達雄は、今日のこをあとで家島と電話で話すとき、雪の話題になり、きつと「このあたりは日陰なので雪がなかなか溶けないんです」と家島先生は言うだろうな、と思った。

空き地からアパートに入るところで、ちょうど真ん中の大きな窓

の見える部屋があり、その窓がぼんやりオレンジ色に浮かんでいた。そのなかに赤い色が見えた。服を着た女性が座って、たぶんこたつに入って背を向けているなど達雄が思ったとたん、その部屋の前に黒いステーションワゴンが止められ、ハッチを全開にし荷物を積み込んでいる何人かの人影があつた。女性が二人男性が一人、おそろく積込の荷物の多さから見て引越したろう。

達雄はその車をよけてコンクリートの基礎が地面にむき出しになっている中廊下をすすみ、家島の部屋の前に向かった。

ドアの横の細長い窓は暗く、家島の単車は止められてなかった。正月に達雄が来たときと同じだったが、正月にドアノブにひっかけていたプラスチックのトレーに入れたおせち料理の袋はなく、昔よくみた縦長で下部にすりガラスの窓のある赤の郵便受けから、あのときのぞいていた家島宛の年賀状もなかった。

あれからちょうど二週間になるが、あのあと家島から直接電話はなかった。なのであれらの生物がずっとドアノブにぶら下がっているのでは、ときがかりだった。二年前、家島は新聞配達のアルバイト中にバイクで事故を起こし、二三か月入院後、全治しないまま退院し、それ以来仕事ができず自宅で療養していた。

そのことを知ったのがたしか達雄の母親がくも膜下出血を起こすまえだったように思う。家島もあとで達雄の母親が手術を受けた同じ医者にかかっていたことを知ってびっくりした。

家島は事故で頭を打つたため、検査を繰り返し、異常がないのでいったん退院となったが、退院の前日急患のため病室を変わった。

その病室は家島一人で静かだったのか、寝ているとそれまで気付かなかつた音が頭のなかから聞こえた。そこでもう一度その音のするあたりを検査すると小さな動脈瘤が見つかったという。

ただそれは手術の不可能な場所にあるため、薬を飲んで様子を見ることしかできないらしい。

「破裂したら助かる確率は低いでしょう」と家島は少し笑いながら話していた。爆弾をかかえたまま、どうすることもできない。そ

れを悲壮がったり、嘆いたりするとところが家島にはなかった。

どこまでも自分の疾患を客観的にとらえ、症例として観察している優秀な医師のようだとこれが家島にはあった。検査後見つかった動脈瘤のため、延期された入院中も、家島は病院の図書館に毎日行き自分の症状のことを研究していたと言っていた。

それだけに達雄は家島がもしかしたら部屋の中で倒れているのではと、心配していた。

ただ、彼の唯一の同居家族である達雄の母が達雄宛に電話があったと言っていた。たぶん家島から伝言を受けていたのだろう。達雄の母は二年前にも膜下出血を起こし、その場の対応はなんとかできるが、電話の内容を言葉で伝えることができない。誰からどんな内容だったかを覚えるためのキーワードがすぐに浮かばないため、記憶できないのだろう。しかし誰かから電話が達雄にあった、とだけは伝えることができた。

達雄は次の日家島に電話してみたが、案の定家島はでなかった。ひよっとすると、あまりないことだったが、何かがあつて、留守にされているのかもしれない。

達雄はメモを入れたかったが、ペンも無く、また引越し作業中の部屋は、同じ並びのドアだったので、急いで鏡餅の1.5倍くらいある固いミッシュブローと菓子パン一個を入れた白い袋をドアノブに下げ、家島の部屋の前から離れ、さっき荷物を積んでいた車の横に向かった。

母親と娘らしき二人がもう作業がほぼ終わったのか、閉まっているドアの前でひそひそ話をしていた。車の横を通り抜けるときに、荷台だけでなく後部の座席にも箱がつまれているのを目にした。荷物を積み込んでいた男は黒のタートルネックのセーターを着ていた。なんとなく娘の父親なのだろうか。孤独で気の毒な気が少しした。

歩き始めると耳にしていたラジオに意識をもどした。

まだその番組は続いており女性の声が英語を話していた。



なんとか聞き取るうとするのをみすかしたように、女性は単語ひとつひとつをゆっくり相手にわかるように話していた。

そのあと日本人のアナウンサーがその外人の話したことを外人に向けわかるように日本語で話していた。

「日本にはすばらしいクリエイティブティがありますね。たとえば店のディスプレイやプレゼンテーションの仕方に細かな他とは違うところを見い出すことができます」

アナウンサーはそこまで話すと自分の質問として、「ヨーロッパはどうですか？」と、いま言われた日本よりヨーロッパの方がいいのではみたいなニュアンスで聞いていた。「たとえばクリスマスツリーとか？」

すると外人が急に英語じゃなくたどたどしい日本語で答え始めた。「ヨーロッパは日本のように地域ごとにそんなに変わるオリジナリティを持っていません。日本はほんとうに地域によってディスプレイがすごく変わります。」

クリスマス・ツリーも日本のほうが、そうゴージャスですよ」

そこで達雄は目の前に見事な枝を濁った炭のような空に広げている大きなけやきの樹が現れるのに気付いた

この樹は、達雄が家島のアパートに来る度に見上げる樹で、ちょうど坂の上であり、分かれ道まではかなりの傾斜があるため来るときはどうしても目にはいる。

樹はなんの木か長い間知らずにただ見て過ぎるだけだったが、達雄は最近になって、その樹がけやきであることを知った。

樹は、道がYの字に交差する真ん中に細長い三角の分離帯が作られていて、そこに三本ならんで立っていた。いちばん手前の樹の根本には地蔵を納めたほこらがあり赤い布がなかで巻かれているはずだが、夜なので見えなかった。

達雄は上ってきた道を引き返すと、車がよく通る車道についた。信号が青だったので勢いで横断歩道を走り渡った。

横断歩道を渡ったのは、実は食事のためにどこか店に入るつもり

であった。

しかしなんとなくそれはためらわれ、歩き始めた道を引き返し、渡ったばかりの横断歩道を引き返そうかどうか迷い始めた。

そのとき、その横断歩道を渡るまでは、正月に家島のアパートにおせち料理を持って訪れたときとまったく同じような時間に、同じような道を歩いていたことに気付いた。

考えれば、これから夜勤のアルバイトに行く、それも前回の正月の3日と同じで、仕事へ行くついでに家島のアパートに寄るとなるのと、そうなるはずだ。

しかし達雄にはなんとなく確信的にもう一度同じルートでそのときに通った道や交通機関をたどることになる予感がした。たしか、家島のアパートへ寄る前にパンを買ったパン屋の前で達雄は年賀状の返事を出した。それもまったく同じだった。

あらためてあのときと同じ道を歩く決心をしたわけではないが、道を渡り終わると、あのときバスに乗ったバス停へと足が向かった。すると前から長い髪のカーキ色のコートを着た女性が自転車に乗って歩道を走り、達雄の横をすり抜けていった。

白い顔が寒さからかほてっていて、さつきラジオで聴いた女性アナウンサーの声を思わせるような、懐かしいバロック的な美しさを感じた。たしかに、その地域は、どこことなくバッハの音楽が、畑やつけもののある農家の名残と奇妙にマッチする雰囲気を持っていた。その記憶は、達雄の幼児期に、よくこのあたりに来た思い出とともにあった。

そしてたしか正月にも同じ場所で自転車に乗った女性とすれ違ったことを思い出した。

同じ女性ではないだろうと意識は告げていたが、このままではあのときと同じルートをもういちど自分はたどるのではないかと、うっすらと考えた。

しかし達雄のは、まだどうしようか迷っていた。それを振り切らせ、さつき感じた漠然とした予感を確信に変えたのは、あのとき乗

ったのと同じ系統のバスが達雄を追い越していったときだった。達雄はバスを追いかけた。

歩道の並木は黒々と達雄の横を通りすぎた。根本には白くぼんやりと雪の塊が見えた。しかし、バスは走り去った。

バス停では、そのバスには乗らなかつた若い学生っぽい男がポケットに両手をつっ込みながら姿勢よく伸びあがるようにして寒さをしのいでいた。

達雄はバス停で次に来るバスが近づいているのを確認すると、バス停から離れ、その学生の後ろにならんだ金属製のベンチの列を見た。

それはバス停のすぐ横に歩道に面している信用金庫が、サービスで用意したものらしく、普通のベンチよりデザインもよく数もたくさんあった。

そのベンチのならばの横に液晶の画面があり、銀行の宣伝を写し出していたが、夜なので画像は静止していた。

達雄はその黄色い紅葉した银杏並木を写した画像を見て、ふいにビートルズの「アイル・ビー・バック」という曲が頭に浮かんだ。

それは達雄のなかでみるみる音量を増していき、もうほとんど聴いていなくなつたイヤホンのラジオの音を超え、頭に響き始めた。

確か、テレビで大臣を降格された、少しシュワルツネガーがやつていた「ターミネーター」のアンドロイドに似た政治家が、おそらくその風貌を意識してのことだろうが、記者会見のコメントを終えて、最後に「アイル・ビー・バック」と言っていたことを思い出した。

あのジョークとも決めセリフとも区別のつかない、すこし弱々しい大臣の答弁より、ビートルズの歌声は新鮮で力強く感じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2994q/>

---

アイル・ビー・バック

2011年1月26日04時04分発行